

# 白藍塾オリジナル

## 2022入試小論文分析&解答のヒント

2022年4月発行

白藍塾の入試小論文分析は、他の予備校と違って、その問題に対して受験生がどのようにアプローチすればよいのかを具体的に説明している。そのため、この分析を参考にすれば、誰でも合格レベルの答案を書けるはずだ。該当の大学・学部の志望者は、ぜひ、これを読んで、自分で実際に答案を書いてみてほしい。

執筆・大原理志

### ● 慶応・文学部

長めの要約問題+短めの小論文問題という出題形式は、近年の傾向と同じ。ただし、今年度は要約問題が300~360字と、一昨年度までと同じ字数に戻っている。

課題文は、ハーバーマスやロールズといった哲学者の議論を紹介しながら、リベラル派の想定する「正しさ」の根拠を問い直すという内容。一見読みやすい文章だが、かなり原理的な議論が展開されていて、こうした文章に慣れていない人にはなかなか理解が難しいかもしれない。簡単にまとめると、次のようになる。

「ハーバーマスによれば、かつては合意を目指して議論を積み重ねる公共的な議論の場が民主主義の成立を支えていた。それが資本主義の進展によって失われてしまったため、再びそうした公共性を取り戻す必要がある。だが、ハーバーマスのそうした理念は、同じ理念にコミットして初めて『正しい』とみなされるので、そうでなければ単なる非現実的な理想にしかならない。ロールズは人間の自然状態を想定して、そうした原初状態に置かれた人間は誰もが不平等や格差のない社会を望むはずだとした。そして、『自由』と『平等』を普遍的な正義と考えた。しかし、こうした理念も、それにコミットした覚えのない人々にとっては正義の押し付けとしか感じられない。『自由』や『平等』を普遍的なものとする正義の理念がどうやって成立したのか、考え直す必要がある」

設問Ⅰは、以上のような内容を字数に合わせてまとめるとよいだろう。

設問Ⅱは、「正しさ」について、課題文を踏まえて自分の考えを述べることが求められている。課題文の筆者は、リベラル派の語るような「自由」「平等」を重視する「正しさ（正義）」とは決して普遍的なものではなく、その理念を共有していない人にとっては正義の押し付けになってしまうと論じている。したがって、リベラル派の語るような「正しさ」が普遍的なものかどうかを問題提起するのが正攻法だろう。

ノー、つまり筆者の考えに賛成の立場で書く場合は、「正しさ」を判断する基準が時代や社会の価値観によって変化するものであることを論じるとよいだろう。もう一步踏み込んで、例えば自由・平等といった近代西洋の「正しさ」を普遍的なものとするのが、別の「正しさ」（例えばイスラム教など）とぶつかって、文化的・宗教的な対立を引き起こす危険性などを論じることが出来るはずだ。

イエスの立場で書く、つまり「普遍的な正しさがある」と論じる場合は、やはり課題文の言う「公共性」や「自由」「平等」などが、いかに普遍的な理念かを説明するのが書きやすいだろう。その場合、「自由」「平等」などが決して自然的な概念ではなく、人間が文明の進展に伴って歴史的に獲得してきた理念であって、決して時代や社会によって左右されるものではないことを、しっかりと論じるとよいはずだ。

字数が少ないので、論を深める必要はない。しっかりと問題点を理解していることを示すだけで十分だ。

©執筆者の許可なく本紙の全部もしくは一部を無断転載、無断複写することを固く禁じます。

発行・白藍塾総合情報室 (03-3369-1179) <https://hakuranjuku.co.jp>